

Copyrighted materials of the authors

日本語のノダに類する文末談話標識の通言語的研究：
「思考プロセス」の観点からのアプローチ
(平成27年度第1回研究会)

日時： 平成27年5月9日(土曜日)(午前9時より午後7時まで)
10日(日曜日)(午前9時より午後4時まで)

場所： AA研 302号室

報告者名： 角田三枝(AA研共同研究員 立正大学非常勤講師)

2015年度 第1回 研究会報告

参加者(9名)： 梅谷博之、海老原志穂、大塚行誠、桐生和幸(10日のみ)、
児倉徳和、千田俊太郎、角田太作、星泉、角田三枝

<研究会の内容>

5月9日(土)

①海老原志穂(AA研共同研究員、AA研研究機関研究員)

アムド・チベット語の調査結果見直し

②角田三枝(AA研共同研究員、立正大学)

統計結果の報告

③角田三枝(同上)

調査結果の概要、思考プロセスとの関係

④星泉(AA研所員)

カム・チベット語と思考プロセス

⑤児倉徳和(AA研所員)

シベ語と思考プロセス

⑥千田俊太郎(AA研共同研究員、京都大学)

朝鮮語と思考プロセス

⑦梅谷博之(AA研共同研究員、AA研特任研究員)

モンゴル語と思考プロセス

5月10日（日）

①桐生和幸（AA 研共同研究員、美作大学）
ネワール語と思考プロセス

②大塚行誠（AA 研共同研究員、東京外国語大学）
ビルマ語と思考プロセス

③ワークショッププログラム素案の作成・検討（全員）

<今回の研究会の成果>

今回は、アムド・チベット語（海老原志穂）の調査結果の第二回目の見直しを行った。（角田三枝が前回の調査結果の発表後に、それぞれの言語の調査結果を検討してまとめた質問、コメントなども考察の材料とした。）

昨年秋から二回に分けて、筑波大学の大学院生（海津洋介氏）に、調査結果のデータの統計的分析をお願いしていた。3月末に角田三枝と角田太作が、二度目の分析結果の報告を受けた。今回の研究会では、角田三枝から統計的分析の結果の概要を説明した。

また、角田三枝が統計分析の結果も参考にして、これまでの調査結果の全体の概要をまとめ、さらに思考プロセスにかかわる言語類型論的に重要な発見があることを図式化して示し、報告した。この発見はある種の **epistemic scale** として表すことができる。

すべての言語について、それぞれの言語の担当者（アムド・チベット語（海老原志穂）、朝鮮語（千田俊太郎）、ネワール語（桐生和幸）、ビルマ語（大塚行誠）、カム・チベット語（星泉）、モンゴル語（梅谷博之）、シベ語（児倉徳和））が、調査結果を見直して、ノダの「思考プロセス」との関係を再度検討するとともに、成果発表として年度末に計画しているワークショップや今後の出版物などを念頭に、どのような観点から個々の言語の研究を深めるかについて、テーマを報告した。

さらに、年度末に計画しているワークショップの具体的な内容や時間配分等を検討しておおよその予定をたてた。

今回の研究会では、本プロジェクトを総括し、ノダ相当の形態が出現する通言語的な条件、個々の言語におけるノダ相当の形態が現れる条件等今後の研究につなげてゆくための大筋の概要がまとまってきた。今後も調査結果をより綿密に検討することにより、ノダ相当の形態が出現する通言語的な条件、個々の言語におけるノダ相当の形態が現れる条件等をさらに解明してゆく方針である。